

第 13 回 デフリンピック運営委員会 (議事概要)

1 開催日時

2026 年1月 21 日(水) 10 時 30 分から 12 時 00 分まで

2 開催場所

戸山サンライズ 全国障害者総合福祉センター 2階大会議室

3 構成員等

○委員(構成員)

委員長 久松 三二(一般財団法人全日本ろうあ連盟 常任理事)
副委員長 薬師寺 道代(医師)
石原 保志(国立大学法人 筑波技術大学 学長)
延與 桂(公益社団法人 東京都障害者スポーツ協会 会長)
小椋 武夫(一般社団法人山梨県聴覚障害者協会 事務所長)
畑中 淳子(弁護士)
渡邊 知秀(東京都スポーツ推進本部長)
松橋 早友梨(デフリンピック選手) ※欠席

○事務局

倉野 直紀(一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック運営委員会 事務局長)

4 要旨

【委員長挨拶】

(久松委員長)

- ・本日は、お忙しいところ、第 13 回デフリンピック運営委員会にご出席いただき、感謝申し上げます。
- ・今回は対面で薬師寺委員、延與委員、小椋委員、畑中委員、渡邊委員、オンラインで石原委員が参加されている。
- ・私から、一言、ご挨拶を申し上げます。
- ・今回、東京 2025 デフリンピックが無事に開催され、非常に良い大会だったと多くの方々から評価をいただいた。
- ・全国の行政の方々に、積極的にデフスポーツやパラリンピックとのつながりといった部分をご支援いただき、広めることができたかと思う。改めて、レガシーを今後活かしていきたいと考えている。
- ・東京都、事業団の皆様方には、多くのご支援をいただいたことをこの場を借りて感謝申し上げます。
- ・10 月の第 12 回運営委員会では、大会直前の開催ということで、具体的な大会の準備状況等について報告させていただいた。
- ・本日は、競技映像配信での日本手話言語による解説や大会報告書等について、順次ご報告をさせていただきます。
- ・皆様、本日も忌憚のないご意見よろしくお願ひしたい。

【議事進行】

(久松委員長)

- ・それではこれより次第に基づき報告に入る。

○報告(1)第9回利益相反管理委員会について

(久松委員長)

- ・まず、第9回利益相反管理委員会について、倉野事務局長より報告させていただく。

(倉野事務局長)

- ・利益相反管理委員会は、運営委員会の事業活動における取引の公正性や信頼性を確保するため、連盟理事、監事及び運営委員会の運営委員、運営委員会事務局職員の利益相反関係を審査する。
- ・12月16日に第9回利益相反管理委員会を開催し、役職員等からの利益相反自己申告書の審査及び利益相反管理チェックシートの確認について、審議を行った。
- ・審議を行った結果、利益相反自己申告書や利益相反管理チェックシートのいずれとも、利益相反事項がないことやチェック箇所の内容に問題がないことを確認・承認された。

○報告(2)DEAF SPORTS HOUSE の設置と実績について

(久松委員長)

- ・次に、DEAF SPORTS HOUSE の設置と実績について、倉野事務局長より報告させていただく。

(倉野事務局長)

- ・子どもたちや市民、デフアスリートが、デフスポーツやデフリンピック、ろう者の文化への理解を深めるとともに、交流を通じて選手を応援できる場として、デフリンピックスクエア内に「DEAF SPORTS HOUSE(デフスポーツハウス)」を設置した。
- ・来場者にはパンフレットやデフスポーツ応援漫画シール等を配布し、スタンプラリーの1か所となったこともあり、大会期間中の来場者数は8,936名にのぼった。
- ・デフスポーツ・デフリンピック関連の展示では、デフリンピック100年の歴史や応援漫画、全国キャラバン活動をパネルや動画で紹介したほか、今大会および2017年サムスン、2009年台北の過去大会のメダルを展示した。
- ・また、ろう者の文化体験として、ろう者2名のアーティストによる作品を展示したほか、応援メッセージボードや交流スペースを設置した。交流スペースでは競技中継の投影も行い、来場者や各国選手が交流しながら選手を応援できる機会を創出した。

○報告(3)日本手話言語による解説について

(久松委員長)

- ・次に、日本手話言語による解説について、倉野事務局長より報告させていただく。

(倉野事務局長)

- ・東京2025デフリンピックに向けて、日本手話言語による解説のための解説者及び手話言語通訳者の養成を進めてきた。大会では、音声解説に対する国際手話通訳及び日本手話言語通訳の配置に加え、18競技の各決勝戦では手話言語による解説を実施することができた。
- ・スポーツ放送分野へきこえない当事者が参画することで、放送アクセシビリティ及びバリアフリーの仕組みを構築することを目的とし、手話言語アナウンサー・解説者・通訳者養成研修会を行った。

- ・2024年5月から8月に対面研修やスタジオ実習を含む47時間のカリキュラムを行い、修了者は49名となった。
- ・次に、2024年度の養成研修会修了者及びデフ競技団体等からの推薦者を対象に、解説におけるスキルの要点を再確認し、実践力の向上を図るために、「東京2025デフリンピックに向けた日本手話言語解説集中研修会」を開催した。
- ・2025年10月から11月に対面研修や履修を実施し、解説者23名、日本手話言語通訳者40名が修了した。
- ・そして大会本番ではこれら研修の成果として、18競技の決勝戦において、解説者22名、日本手話言語通訳者40名による解説が実現した。活動実績は、延べ55日間、延べ167名にのぼる。

○報告(4)大会実績報告について

(久松委員長)

- ・次に、大会実績報告について、清水部長より報告させていただく。

(清水部長)

- ・大会の基本情報を載せているが、参加国・地域、参加選手数などの数値は現在もICSDに確認中のため、12月時点の速報値とさせていただいている。
- ・日本選手の活躍について、メダル獲得数は過去最高の51個となった。そのほかにも、世界デフ新記録や大会新記録も多く出た。次ページでは各国選手団のメダル獲得総数のランキングを掲載しており、日本は第2位という素晴らしい結果だった。
- ・来場いただいた観客について、約28万人もの方々に競技会場へ来場いただいたことに加え、サインエールを活用し会場が一体となって選手を応援できたことにより、コミュニケーションの壁を越え、共生社会への一歩を踏むことができた。
- ・競技別入場者数のランキング上位10競技を紹介している。陸上をはじめ、各競技にたくさんの方々にお越しいただけた。
- ・デフリンピックスクエアで実施した各種プログラムの紹介をしている。
- ・続いて、大会を支えていただいた方々について掲載している。国際手話通訳者100人・日本手話言語通訳者141人の方々にご活躍いただき、ボランティアは2,959人の方に活動いただいた。
- ・大会サポートスタッフとしては、筑波技術大学の学生98人、協賛者の社員等608人の方々に参画いただいた。
- ・続いて、協賛いただいた主要な3社であるアシックス、トヨタ自動車、ソフトバンクにご支援いただいた内容をご紹介している。
- ・メディアについて、期間中多くの取材をいただき、競技動画やSNSでは多くの方にご覧いただいた。
- ・続いて、都の取組事例として、ユニバーサルコミュニケーションとサインエールについて、大会時における実施内容の報告を記載している。こうした取組により、選手の活躍を後押しできたと考えている。

○報告(5)大会報告書について

(久松委員長)

- ・次に、大会報告書について、北島部長より報告させていただく。

(北島部長)

- ・大会報告書の内容は、「大会概要」からはじまり、「大会前の取組」、「大会運営」、「大会スタッフ及びボランティア」、「財務」、「大会に向けた共生社会実現に資する取組」、最後に「レガシー」と、全7章の構成となる。
- ・作成に当たっては、全日本ろうあ連盟、東京都、(公財)東京都スポーツ文化事業団の3者で発行を行うものである。
- ・また、完成した大会報告書(英語版)については、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)に提出を行う。
- ・今後、大会報告書が完成次第、皆様にお渡しする予定。
- ・大会報告書の内容については、本来であれば、すべて運営委員会に確認をとっていきべきであるということは重々承知しているが、2月頭には原稿を確定させ、その後、1か月かけてすべて英訳し、3月末までに製本をする必要があるため、事務局側に一任していただきたい。
- ・各種数値については、現在、ICSDに確認・調整中であり、1月末には確定させる予定であるため、今回記載の数値から若干相違がでることはご容赦いただきたい。また、最終的に大会報告書に記載される数値が確定の数値である。

報告(6)大会収支の今後の対応について

(久松委員長)

- ・次に、大会収支の今後の対応について、清水部長より報告させていただく。

(清水部長)

- ・本大会の計画額については、令和5年12月に「東京2025デフリンピック大会規模(計画額)について」を取りまとめ、その後、令和6年12月に収入内訳を整理している。
- ・大会終了に伴い、現在、全日本ろうあ連盟、東京都、東京都スポーツ文化事業団の3者で経費を精査しているところで、今後、大会収支の見通しとして公表していきたいと考えている。

【意見交換】

(久松委員長)

- ・それではここで、出席者の方々から意見をいただければと思う。まずは、オンライン参加の石原委員から如何か。

(石原委員)

- ・本当に良い大会で、予想以上の成果があがったと思っている。
- ・まず私が感動したのは、開会式の日千駄ヶ谷の駅を降りたら、世界中のろう者が集まり世界中の手話で話していたことである。あれは完全に「デフワールド」だった。デフはマイノリティと言われるが、あの場面は完全にデフがマジョリティで、きこえる日本人の人は脇の方を歩いていた。それがすごく印象的だった。そのようなところから始まり開会式も素晴らしかった。大会自体も開会式も閉会式も素晴らしかった。
- ・筑波技術大学は、大会期間中、授業を休講にして学生と教職員全員が参加できる状態にした。学生たちの感想を聞くと、全員がとても良い経験になった、このような体験は一生に一度しかないと言っていた。もちろんアスリートとして参加した人もいるが、ほとんどの学生はサポートスタッフとして参加しており、色々な方々と交流して自分が経験したことのないコミュニケーションの技術を知ったり工夫したりすることができたことは、学生たちにとって非常に良い経験となった。こういう機会をいただきありがたく思っている。

- ・私自身も良い機会をいただいた。自分の考え方が変わるくらい大きな大会だったと思う。
- ・開閉会式での色々なパフォーマンスと「共生社会」は親和性が非常に高いということを改めて感じた。
- ・今大会に関わらせていただいたことに本当に感謝を申し上げる。

(久松委員長)

- ・「デフワールド」ということで、今大会では、色々な意味で手話の花が咲かせられたのではないかな。
- ・今大会では学生が主体となる活躍の場を作れたということで、今後も期待したい。

(薬師寺委員)

- ・最初に、久松委員長が重点的な取組として「子どもたちの関わり」を挙げていたが、たくさん子どもたちに競技会場に来場いただいたことが非常に良かったのではないかなと思う。ろう学校子どもたちだけではなく、幼稚園や小学校、近隣の子どもたちも来ており、一生懸命に自分たちなりの応援グッズを作って応援したり、きこえない、きこえる関係なく応援していたりしたのも素晴らしかった。これは必ずレガシーとして次の世代に残っていくのではないかな。
- ・筑波技術大学の学生たちも、寒空の中、世界中の人々に声を掛けられながら、一生懸命写真撮影をやってくださっていた。デフリンピックスクエアの筑波技術大学のブースにも行ったが、世界中、特に東南アジアの国々の方が「日本にこんな大学があるんだ」と非常に興味を持っていた。このようにデフリンピックスクエアでは、技術だけではなく日本におけるきこえない・きこえにくい方の教育環境も理解いただけたのではないかなと思う。
- ・ボランティアについて様々なご意見いただいていることは確かだが、皆様が精一杯、自分が持っている力で、ろう者はろう者なりに、聴者は聴者なりにコミュニケーションを取ろうとしたことは確かである。満足いただけなかった点もあると思うが、過去大会と比べても、これほどまでにコミュニケーションに対するこだわりを持って開かれた大会はない。(過去大会では)会場に通訳がほとんどいなかった。したがって、今回の大会をはじめとして、日本だけではなくデフリンピックのレガシーにもなっていくのではないかなと思う。
- ・YouTube での競技中継では、日本手話言語と国際手話の両方で解説があった。会場にいるよりも、YouTube で観た方が内容が分かったと、後から意見をいただいたほど本当に素晴らしかった。オリンピックやパラリンピックに劣らないような解説の中で(競技を)観られたことで、皆様は楽しめたのではないかなと思う。
- ・今、全国各地で表彰が相次いでいる。各市町村や障害者団体からひっきりなしにアスリートが呼ばれている。今までこのようなことはなかった。これも本当に嬉しいことで、今後も市町村の皆様に興味を持っていただける機会になったのだと思う。
- ・海外の選手からも、100周年にふさわしい大会だったと感謝の言葉をいただいている。これまで観客がいる中で試合をした経験があまりなかったところ、たくさんの観客の方々が、日本の試合でなくても自分たちを応援してくれていたということが本当に嬉しかったようである。この100周年の大会を日本で開催すると決断された ICSD、また東京都にも感謝を申し上げる。
- ・運営側としては、バリアフリーや共生社会を目標として大会を計画、運営してきたが、それがろう者の皆様に伝わっていなかったことが非常に残念だったと思う。ろう者の、ろう者による、ろう者のための大会であると考えていらっしゃった方が多く、聴者がここまで入り込んでやっているということが想像できておらず(ろう者にとっては)想定外だったとのことである。ろう者、聴者の垣根を超えた大会になるよう尽力してきたという部分を、今後も、全日本ろうあ連盟の皆様方に言葉を尽くして手話を尽くして全国の皆様にご説明いただきたいと思います。

- ・これも想定外のことだったが、先進国の選手に手話が分からなかったという方が多かった。私自身も国際手話などで様々な方とコミュニケーションを取ろうとしていたが、手話が分からない方が多かった。通訳アプリなどを使った方がコミュニケーションが取れることが多く、段々そのような時代になってきたのだと感じた。国際手話が分からない選手も大変多かったため、コミュニケーションということについては、今後、ICSDにもご提言いただきたい。
- ・競技会場において、子どもたちが来るのは夕方にも関わらず、朝からずっとその席が確保されていたことがあった。朝の試合を見たいがその席は使えないなどにより、結局会場の外には長蛇の列ができていたこともあった。このことについて各会場でかなりハレーションがあったことが非常に残念であった。会場によっては臨機応変に対応しているところもあったが、今後の反省点として、なるべく多くの方に観ていただけるような工夫が必要である。ただ、これだけ多くの方に来ていただけたことがまず想定外だったため、致し方ない部分もあると思う。ぜひ、今後の競技運営に活かしていただければと思う。

(延興委員)

- ・毎日会場に行き、大島を除くすべての会場に観戦に行った。どこの会場も大変賑わっており感動の連続だった。
- ・一番衝撃だったのが会場を埋め尽くす手話で、本当に圧倒されて、ここにおいては自分がマイノリティだと感じ、やはりデフリンピックは単なるスポーツの大会ではなくて、世界中のデフコミュニティを繋ぐお祭りであるということに本当に感動した。加えて、今回が特別だったのは、そこにきこえる私たちも混ぜてもらい一緒に盛り上がったことである。これはデフリンピックの100年の歴史で初めてのことで、次の100年を拓く画期的な出来事だったと思う。
- ・手話ができないボランティアがいるなど様々な批判もあったが、それに対して全日本ろうあ連盟が、きこえない人もきこえる人も一緒にやる大会だというスタンスをきちんと貫いて発信して下さったことが本当に素晴らしかったと思う。感謝申し上げる。きこえる人にとって大変意義のある大会だったと感じている。
- ・もう一つ私が忘れられないのが、開会式で君が代の手話を初めて見たことである。君が代の意味が非常に伝わり、本当に美しかった。また、手話による演劇や狂言などを色々見る機会があり、手話がこんなに豊かな表現力のあるものだったのかと感動した。
- ・昨年制定された手話施策推進法について、きこえない人が不便を感じないための法律だと思っていたが、今大会でたくさんの手話に触れて、音声言語とは全く違う表現や文化を持った1つの言語であることを痛感し、手話施策推進法に対する考え方を改められた。
- ・この素晴らしい大会を支えて下さった全ての方に御礼を申し上げたい。ぜひ今大会のレガシーを今後も活かして、デフスポーツやパラスポーツの振興を図り、4年後はギリシャへ応援に行きたい。
- ・手話による解説者の育成は、本当に素晴らしいことだと思う。パラリンピックの時もパラスポーツを解説できる人がおらず育成に尽力したことがあった。NHKなどもアナウンサーの教育などをして下さったことで、今のパラスポーツの報道がある。ぜひ、今後、私どもで主催するスポーツイベントや大会でそのような方に活躍していただきたいと思うので、引き続き連携をお願いしたい。

(小椋委員)

- ・東京都より多大な支援をいただき、また全日本ろうあ連盟においては詳細な計画を立てていただき、非常に大成功裏に終わったこと、本当に嬉しく感動している。
- ・特に開閉会式については、非常に感動的で心のこもった温かい開閉会式だったと感じている。その中でも特筆すべきことは手話言語による国歌を披露できたことで、それを拝見し涙が出るほど非

常に感動していた。手話言語による国歌については他の団体とも一緒に色々考えたようだが、それを披露できたということに大きな成果を感じている。

- 約 28 万人の観客動員であったということを知り、多くの方々に応援いただいたことを感じた。これは選手にとって大きな力となったと思う。それだけではなく、子どもたちが応援する機会を得たことで、子どもにアスリートという夢を与えることができた。選手がロールモデルとして子どもたちに大きな影響を与えたと思う。将来の成長が楽しみである。
- ボランティア、サポートスタッフ、手話通訳者など全部で約 4,000 人の方に本当に尽力いただいたことに感謝申し上げます。しかし、そのような体制でも、各会場に行った際に、音声言語によるアナウンスに手話通訳や字幕がないという状態があった。つまり、きこえない・きこえにくい人にとって情報がなく流れが分からないような競技会場も多々あったことが残念に思っている。
- 受付の方がほとんど手話ができず、コミュニケーションに課題がありスムーズに入場できなかった場面があったことも少し残念に思っている。情報保障についてより充実させることが必要であると実感した。
- 非常に喜ばしかったこととして、全国キャラバン活動がある。デフリンピックの認知度が低く、この状態だと大会開催には至らないという思いの中で、大会前にキャラバン活動が全国的に展開された。そのおかげで、全国の行政や一般市民の方々に直接お会いすることができ、デフリンピックの知名度が非常に上がったこと、その中に貴重なレガシーがあったと実感している。
- このレガシーを、今後、共生社会づくりというものに繋がるよう進展して欲しいと思っている。本当に感動的な大会をありがとうございました。

(畑中委員)

- 最初に運営委員就任のお話をいただいた際、ガバナンスやコンプライアンスの観点から重点的に意見してほしいということでお受けしたが、私が口を出すこともないくらい完全なるガバナンスが構築されていたのではないと思う。
- 組織委員会のようなものは時限的なもので永続的に存在する組織ではない。そして、大会の最中や直後ではなく、1年後、2年後に問題が出てくる可能性もある。そのため、しっかり組織内でフィードバックをしていただいて、1年後、2年後に何か問題が起きた時にも、資料に基づいてきちんと説明ができるようにしていただきたい。
- 自転車競技の観戦に行ったが、まず、きこえる、きこえにくいに関わらず自転車競技を観ることが初めてで、こんなに過酷なものなのかと本当に驚いた。自転車競技というのはトップのペースによって何周するのかが決まり、そして、どのくらいトップから遅れているかによってレースから外れなければならないという厳しいルールがあり、私が観たレースでも 15 人中 7 人しか完走できないような過酷なものだった。
- 観客は少ないように見受けられたが、応援の仕方や盛り上げ方を現地のスタッフの方が積極的に伝え、観客を盛り上げようとしていた。食べ物の屋台なども出ており、お祭りのような楽しい雰囲気だった。
- (自転車競技会場の)最寄り駅からシャトルバスが出ていたが、その誘導から現地に入るまで、ボランティアやスタッフの皆さんの感じが良く素晴らしかった。
- 自転車競技をはじめ東京以外での実施が難しい競技があることは理解しているが、特に公共交通機関を使って会場へ行こうとすると、観戦ガイドだけでは情報が不十分で大変だった。また、(自転車競技会場の)最寄り駅からシャトルバスは臨時便が出ていたようだが、そのアナウンスも不十分だったと感じた。これらについては、地方会場で開催するうえでの課題の一つだと感じた。

- ・大会期間中に「デフリンピック」という単語を検索していると、「何をやっているかは分からないが、お祭りみたいなものがやっているから行ってみるとデフリンピックだった」という投稿を見た。やはりそれは、バナーやのぼりなどのルックや大会全体の楽しい雰囲気があったからだと思う。デフリンピックが開催されていること自体を知らない人ですら、「何かやっているから行ってみよう」と参加できる大会になったということが、むしろ一番意義があるのではないかと思った。競技のファンの方ではなく、デフリンピックの存在すらまったく知らない人たちが気軽に競技を観に行き、デフリンピックを知ってもらったことが、日本で開催したことの大きな意義の一つではないか考える。
- ・皆様のご尽力に感謝申し上げます。

(渡邊委員)

- ・日本での初開催、そして 100 周年の記念すべき大会を大盛況のうちに終えられたことを大変嬉しく思う。
- ・当初の想定を上回る約 33 万人の方に足を運んでいただくことができたのは、大会前の様々な普及啓発活動や情報発信が功を奏したものと思う。また、デフリンピックの認知度向上、聴覚障害の理解促進といった本来の目的も達成できたのではないかと思う。
- ・大会については、コーサ会長からも準備・設営という部分でもハイレベルだったというコメントが出るほど充実したものになった。改めて、全日本ろうあ連盟、デフリンピック準備運営本部の皆様には感謝申し上げます。
- ・特に、きこえない人ときこえる人が、協働し一体となって創り上げたことは、東京だけではなく日本にとって大きな財産になったのではないかと思う。このことが、今後、様々な部分に良い影響を与えることを期待している。
- ・会場で、サインエールできこえない人ときこえる人が一体となって応援する姿は、大会の意義や価値を伝える、また、社会を変えるきっかけになったと思う。
- ・今大会で得たレガシーの一つは、子どもたちにとって大きな財産を残したことだと思う。
- ・透明ディスプレイや多言語テキストによる案内などのユニバーサルコミュニケーション技術も着実に普及が進んだ。各都府県施設の窓口にも設置したが、市区町村や駅、ホテルなどにも普及が進みつつある。
- ・一番大事なものは、人材を養成できたことではないかと思う。大会前は、国際手話通訳者が全然いないのではないかという話もあったが、大会では約 100 人の方に、日本手話言語通訳についても約 140 人という多くの方に支えていただいた。
- ・また、手話言語解説者という新しいジャンルの認知が世の中に広がった。
- ・競技団体の皆様に、日本国内で国際大会を開催するという経験を様々な形でしていただけた。また、非常に多くの事業者の方にも参加いただき、今までにない大会を知っていただいたことに価値があったと思う。筑波技術大学の学生も今大会に参加したことで、今後社会に出た際により幅広く活躍していただけると思う。
- ・ボランティアの皆様に感想を聞いたところ、ぜひまたやりたいという声が圧倒的である。
- ・今後、国内のスポーツ大会や国際スポーツ大会、学術会議などを開催する土台ができたのではないかと思う。全日本ろうあ連盟の皆様におかれましても、ぜひこの経験を活かしてさらに進んでいけるようご協力をお願いしたい。
- ・東京都では、引き続き、競技団体やアスリートへの支援、国際大会の誘致や開催支援、競技体験会の拡大などに取り組み、今大会を一過性のもので終わらせることなく、さらには、これからデフリンピックを目指す子どもたちや若者にとって励みとなるよう支援を進めてまいりたい。

- ・現在、大会報告書の作成をしているところだと思うが、この大会を通して生まれたレガシーをしっかりと引き継いでいけるよう東京都としても取り組んでまいりたい。皆様のお力もお借りしたいと思う。

(久松委員長)

- ・最後に、本日欠席されている松橋委員からご意見を頂戴しているので、代読させていただく。

(松橋委員からの意見)

- ・大きなトラブルもなく無事に終わったことは、東京都、事業団、全日本ろうあ連盟、ボランティア、スタッフなど皆様の力を合わせた結果だと思う。
- ・会場に入れないほど観客が多くいらしたのは想定外だったが、それを踏まえ、安くても良いので有料での競技観戦でもよかったのではないかと思った。きこえる大会はほとんど有料なので、今回のデフリンピックがきっかけで、今後、同様の大会を開催する際は有料にするという選択肢が出てきたのではないかと思う。
- ・皆様に感謝申し上げます。

(久松委員長)

- ・他にご意見等はあるか。

(延興委員)

- ・デフスポーツハウスの展示、特にデフリンピックの歴史の展示が非常に勉強になった。ぜひ、そこに東京 2025 デフリンピックを加えたものを共有していただき、イベントで展示するなどができれば良いのではないかと思った。

(久松委員長)

- ・100年の歴史を持つ大きな大会で、素晴らしかった、成功だったというご意見を多くいただいたところだが、課題も多く出てきたと思う。
- ・デフリンピックには様々な人が参加している。ろう学校を経験していない人、手話が分からない、できない人、ICT 技術によりコミュニケーションをとっている人など、きこえない人にも様々な人がいる。これを、今大会で学ぶことができたのではないかと思う。
- ・事業団や東京都の皆様と一緒に大会運営をしたことは初めての取組である。3者でのコミュニケーションは円滑に進んだとは言いきれないところも多くあったが、コミュニケーションの基盤は様々な方法で構築していくものであるため、コミュニケーションの選択肢を多く作り、お互いに気持ちが通じ合えるような環境を作ったことで、議論ができるようになる、そのようなことを積み重ねて運営をやってきた。このようなことが大会でも大切だと思う。
- ・「きこえる人、きこえない人が一緒にやる」ということの意義について改めて振り返ることができた。
- ・事業団の皆様も多忙の中で手話を学ぶ時間も作れない状況だったと思うが、自分なりの方法でコミュニケーションをしっかりと取ろうと努力をしてくださった姿勢が非常に伝わってきた。
- ・本当に多くのことを学ばせていただいた。改めて感謝申し上げます。
- ・今大会のレガシーを、あらゆる面で日本社会を変えるために活かすような、新たなテーマができたと思う。
- ・きこえない人、きこえにくい人、様々な人がいるが、社会の中で自分が主役として挑戦できるような機会が増えたのではないかと思う。このような機会を利用し、いきいきできる新たな道を作っていただくように皆様にも応援していただきたい。

(石原委員)

- ・筑波技術大学では、今大会にアスリートとして参加した学生や卒業生の表彰を行っている。また、アスリートに限らず、学生や卒業生が SNS やマスコミに取り上げられデフリンピックについて色々話

している。このように、デフリンピックが、ろう者が色々なことを社会に発信する機会を与えてくれた
と思っている。

(久松委員長)

- 本日も多くのご意見をいただき感謝申し上げます。いただいたご意見を今後活かしていきたいと思
う。
- 最後にオブザーバーからのご意見はあるか。

(オブザーバー・栗野氏(東京都聴覚障害者連盟 会長))

- 私は7年前からデフリンピックの招致活動をやってきたが、日本選手団の副団長として多くのメダル
を取るという目標も持ちながら活動してきた。
- デフリンピックでは全会場を回り、選手団の頑張りや環境の不安がないようサポートをしてきた。
- 51個という過去最高のメダル数は非常に喜ばしく感動している。皆様に感謝申し上げます。
- また、東京都や事業団の皆様の大変な支援のおかげで、過去大会に比べ大会の知名度がアップ
した。このようなきっかけで、選手がスポーツをする環境などが整えられていくのだろうと思った。
- アスリートファーストということで、企業に採用されることなども今後多くなり環境が大きく変わって
いくのではないかと思う。
- 国際手話通訳も増えたので、様々な世界大会などでも役割を担ってくれるだろうと非常に期待をし
ている。
- 今大会をきっかけに、引き続き、応援していきたいと思った。本当に感謝申し上げます。

(久松委員長)

- 報告だが、陸上競技の湯上選手がパラスポーツ大賞を受賞し、明日の夜、表彰式が行われる。ま
た、国際ろう者スポーツ委員会(ICSD)からデフリンピック運営委員会が名誉勲章を、日本選手団
とデフリンピック運営委員会が朝日スポーツ賞の特別表彰をいただいた。
- 皆様には懸命に大会を支えていただいたことに改めて感謝申し上げます。これをもって運営委員会
を閉会する。ありがとうございました。